2010年モスクワ滞在の報告3：

サランスク・ウニベルシアード2010：地方の若手作家の育成

スラブ研究センターGCOE共同研究員　前田しほ

2010年のモスクワの冬は厳しく、雪も多かった。そのため、いつまでたっても、車道も歩道も、雪解け水が川のように溢れていた。それでも、ようやく地面が乾き、青葉が目に心地よい4月の末、モルダヴィヤ共和国の首都サランスクでは、近隣地域の若者を対象にした文学コンクールの最終選考会が開かれた。モルドヴィヤ（Мордовия）は、RとLの区別が難しい日本人にとって、ウクライナとルーマニアに囲まれたモルドバ(Молдова)と混乱しがちであるが、こちらは列記としたロシア連邦構成体である。地理的には、リャザン州、ニジェゴロド州、ペンザ州、ウリヤノフ州、チェバシ共和国に囲まれる沿ヴォルガ連邦管区に属する。が、ある年齢以上のロシア人にとっては何よりも、多数の強制収容所が乱立した悲劇の地であり、何百人万という人々が不遇の死を遂げた暗い記憶と結びついている。筆者は審査委員たちと夜行列車で同地へ向かったのだが、クペーの中では、お茶を飲みしな、ラーゲリに関するブラック・ジョークで盛り上がった。今回の文学賞の主催者兼開催会場であるサランスクのオガリョフ名称モルドヴィヤ国立大学（旧モルドヴィア高等師範学校。略称МГУ、似たような名称の大学がほかにあって、いささかまぎらわしい）にしても、追放されたミハイル・バフチンが教鞭を取ったことで知られる。コンクール・スタッフによると、バフチンのおかげで、大学の教育レベルが飛躍的に向上し、未だに定評があるので、ここの学生が就職先に困ることはまずないのだという。またバフチンが実際に教鞭を取った講義棟は、当時のまま保存されているという。

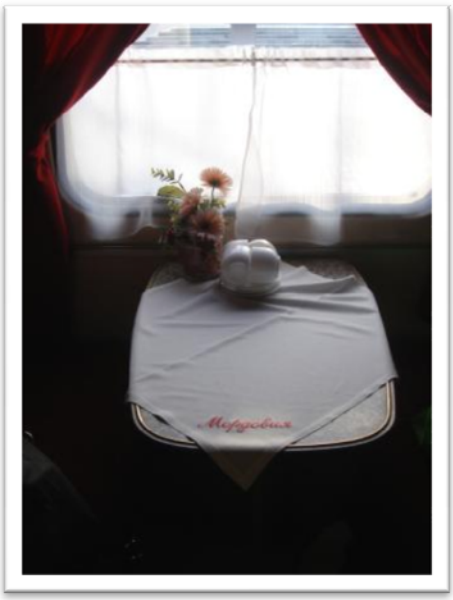

写真１：サランスクーモスクワ間の夜行列車のコンパートメント

写真２：テーブルクロスに刺繍された「モルドヴィヤ」の文字にすら、負の記憶が刺激されて、ぎょっとするとのこと

現在のサランスクはロシアでももっとも「清潔な町」に輝いたということだ。確かに、街中は丁寧に掃き清められていた。また町の中心地域の建物は、新しく建築されたり、河岸公園もきれいに整備されていた。逆に言えば、情緒的とはいえない風情であった。しかし、汽車の中から垣間見る限り、少しでも都心を離れれば、荒れた沼地と貧しい農村が点在し、いかにも経済的に苦しそうな表情を見せていた。もうひとつ、地方のほうが、少なくともサランスクにはソ連的な雰囲気が強く残っているように感じた。時期が時期だけに、戦勝65周年を祝う準備が町中で行われ、メーデーを祝うマスゲームの練習が、大学の隣のスタジアムから終日歓声を伴って、聞こえてきた。

写真３：大学正面入り口に掲げられたバフチンの記念プレート。

写真４：夕暮れの河岸公園で。分刻みのスケジュールの合間に案内してもらう。

写真５：移動中に撮影したサランスク市の中心部の様子。これはプレスセンターである。あいにくの雨で、雫が写り込んだ。



さて、今回のコンクールは、表向き、モルドヴィアの民族統一1000年を祝う祝賀イベントの一環と位置づけられ、モルドヴィア大学、モルドヴィア共和国出版情報省、サランス

ク市青少年文化・スポーツ委員会、沿ヴォルガ連邦管区若手作家協議会などが協賛した。したがって、対象者は沿ヴォルガ連邦管区内の大学関係者（学生、院生、教員等）で、「第一回サランスク・ウニベルシアード2010」と銘打たれていた。しかし、コンクール自体は、モルドヴィア大学院生のデニス・ラーシンが中心となって行い、対象者や地域に多少変化があるものの、本年は実に5回目の開催ということである。筆者がこのコンクールに関わったのは、モスクワ滞在中お世話になっているイリーナ・コヴァリョーヴァが、敏腕編集者であると同時に若手作家育成のスペシャリストであり、当コンクールにも設立時から協力してきたからである。今回もスポンサー集めから、審査団結成に駆け回り、さらに現代文学の状況調査に携わる筆者の同行に尽力してくれたのである。この場をかりて、改めて感謝の意を表したい。

さて、コンクールの応募者は100人以上、第一次審査が入り、散文、韻文部門各12名、批評2名の26人名に絞りこまれた。選ばれた24人は夜行列車にのり、バシキール、タタールシタン、サマーラ、オレンブルグ、ニジニ・ノヴゴロド、ペンザなどから、はるばるサランスクに集合した。審査委員もまた、上述のコヴァリョーヴァ、「文学の諸問題」誌編集長で「ロシア・ブッカー」賞審査委員のイーゴリ・シャイタノフ、作家アナトリイ・コロリョフ、詩人イリーナ・エマルコヴァの4名であった。そして筆者を合わせて、4月28日夜行列車でモスクワを出発、翌朝29日にサランスクに到着する。ここで、大学側が用意した車で、大学付属のホテルに向かい、いかにも高級そうな調度品に驚いた。朝食後、早速コンクールの開会式が行われるサランスク市のプレス・センターに向かった。会場のホールはコンクール参加者とサランスク大学の学生・教員で埋まった。地元メディアも多数集まり、壇上にネームプレートを置いた立派なディスクがある。「もしや…」といやーな予感がする。なんと、筆者も上がれとのことである。無理を言って、招待者リストに加えて

写真６：苦笑いする壇上の筆者。

写真７：司会のラーシン

もらった手前、断れない。さて、協賛の「えらい」人たちの一連の演説の後、筆者にもスピーチの順番が回ってきた。おそらく、日本からの文学研究者をスペシャルゲストに迎えるというのは、国際的に注目されているというアピールにつながり、主催者側にとってのプラス要素となるのであろう。第一回の成功が、今後の継続につながるわけである。観念して、一応それなりの原稿を用意してきた（記憶から消去したい思い出である。幸いにも、もう誰も覚えていないだろう）。

2

小休憩のあとは、ラウンドテーブル「文学的プロセス：中央と周縁」に移った。まず審査委員長のシャイタノフ、そしてほかの審査委員らが順番に昨今の文学状況について私見を述べる。その都度会場から意見が募られたが、大いに盛り上がった。特に、コンクール参加者から（多くは20歳前後の若者たちである）鋭い質問や意見がでて、刺激的であった。さすがは、各地の、文才ある、選び抜かれたメンバーである。一流の識者と会う機会を待ちに待っていたと見えて、積極的に手が上がった。

シャイタノフは、自身が編集長を勤める「文学の諸問題」では、最新の現代文学（狭義ではновейшая литератураがよく用いられる。遡ってもせいぜい80年代。современная литератураはもっと広範で、20世紀後半全体を指すこともできる）については、20代、30歳前後の若い世代が中心になって活躍していると、若者たちに励ましの言葉をかけた。また1980年以降のロシア文学の動向について簡単にまとめると、「ロシア・ブッカー」賞の受賞者決定の内実などを披露した。審査する側からの話というのも、面白いものだった。例えば、アナトリー・アゾーリスキーの『檻』が受賞した97年は、アゾーリスキー、アントン・ウトキン、オリガ・スラヴニコヴァの作品をめぐって激論が展開したのだという。しかしその年はなによりも、ペレーヴィンの『チャパーエフとプストタ』がでたのに、ファイナル・リストにさえ挙がらなかったことが大きなスキャンダルとなった。マスコミがつめかける記者会見場で、リストが読み上げられると、一瞬の沈黙の後、一斉に「ペレーヴィンはどこだ」と轟々たる非難の嵐になった。シャイタノフはこの時、審査委員長だったわけだから、話には臨場感があって、会場は笑いに包まれた。が、もっとも興味深かったのは、ブッカー賞の歴史が、現代文学のプロセスや問題を如実に反映していることだ。例えば、新しい名前が現れる度に、それが小説なのか、文学なのか、それとも文学的プロジェクトなのか、という問題が生じる。審査員は常に、真の文学とは何か、と問いかけながら、選考にあたる。文学とは言語芸術であり、これに値しないと判断されたものは選考から外れる。例えば、大衆文学、そしてポストモダン的な文学的プロジェクト（筆者は人文大のシャイタノフの現代詩の講義に通っているが、彼はポストモダニズムには非常に冷淡である）。厳密な精査の上で、「文学」という概念に該当する作品が選ばれるわけだ。

しかしながら、こうして多大なエネルギーをかけて真面目な文学が選定されても、商業主義の都合の前には、あっさりと敗北する。2002年のブッカー賞作家オレグ・パブロフと

地方都市を回っていたときのこと、最初の訪問地エカチェリンブルグで、パブロフの本が一冊も本屋に並んでいないことが判明した。その日はマリーニナの新作の発売日だったのである。貨車はマリーニナの本でいっぱいで、真面目な文学は、パブロフを含め、マカーニンやシーシキンの箱が数個という有様だったそうだ。

その後、「ソルジェニーツィンらが亡くなった今、いかに書くかに注目が集まった時代は終わった。今や問題はいかに作家であるか」、「作家は世論のリーダーとなりうるか」などについて、議論が盛り上がった。特に目新しい結論が導かれたわけではないが、多くの参加者から意見や質問がでて、大いに愉快であった。

さて、この後は、地元の美術館へのエクスカーションが待っていた。まったく期待していなかったのだが、これが実によかった。美術館の名称となっている同地出身の彫刻家ステパン・エリジャ（1876-1959年）の作品が展示されていた。これまで聞いたことのない芸術家であったが、大理石や切り株に固有の表情を見出し、男女の様々な姿態を刻んだ作品は、それは見事なものだった。ここで、参加者一同で記念撮影（残念なことに、地元参加者は、エクスカーションを欠席したため、全員ではない）。

写真８：美術館にて記念撮影。

## 3

そして、いよいよ、お待ちかねのマスター・クラスが始まった。こちらは、１日目の午後と、二日目の午前が当てられ、私が聴講した散文部門では計4時間にわたって、熱の入った指導が行われた。宮風耕治氏のSF大会の報告「ロスコン参加記」[1]でも、マスター・クラスについての紹介がされているが、雰囲気は大変よく似ている。ルキヤノフと同様、コロリョーフがまず強調したのも、「長編より短編のほうが難しい」だった。まず、良い点を上げ、評価するの

写真９：マスター・クラス１日目の散文組の様子。エクスカーション組の到着が遅れたため、少人数で始まった。

[1] http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100810miyakaze_j.html

だが、その後につづく作品分析と辛口コメントは、聞いているだけで恐ろしくなるほど厳しい。我々の行う学会や研究会の報告とまったく同じである。どこの国でもどの分野でも同じでであろう。期待しているがゆえの厳しい指導であり、一流の作家・専門家による指導は、大いに勉強になったことだろう。審査員たちによると、地方にも、モスクワと同様、優れた才能を持つ若者が大勢いる。しかし、彼らにとって最大の問題は、作品を見て、助言してくれる専門家が身近にいないことである。よって、地方で開催される文学コンクールというのは、作品指導という意味でも、中央とのコネクションを作るという意味で、彼らにとっては、大変貴重な機会なのである。実際、こういったコンクールでの入賞が、作家としてのデビューにつながることもある。

しかし、それにしても審査員たちは大変であったらしい。そもそも候補作が彼らの手元に届いたのは、コンクールの直前であり、サランスクのホテルでも夜遅くまで、そして朝早くに起きて、クラスの準備をしていたそうだ。

写真１１：指導中のコロリョフ。

写真１０：マスタークラス２日目。終了後、講師陣はいつまでも囲まれていた。

4

充実した時間は、あっという間に過ぎる。最後には大学付属の博物館に集まって、「詩のトーナメント」という余興を楽しんだ。これは二人ずつ対戦して、よりよい詩と評価されたほうが、次に進むというゲームである。その合間に、エマルコヴァらの詩の朗読が入り、会場を盛り上げた。

こうして雰囲気が和やかになったところで、表彰式が行われた。散文・詩部門で上位３名、そして批評の優勝者、計7名が発表された。実は、北海道大学の望月恒子先生の協力で、これら入賞者に贈り物を贈ったところ、大変喜ばれた（もっとも評判がよかったのが、大

写真 11：エマルコヴァの朗読

写真１２：表彰式の様子。シャイタノフから賞状を渡される批評部門優勝のオリガさん。

学生協のビニール袋だった）。また、この際大学付属図書館に、「ボリシャヤ・クニーガ」、「文学の諸問題」から本・雑誌が寄贈された。筆者も、スラブ研究センターの望月哲男先生に協力をうけ、センター発行の論文集を寄贈した。

最後に、少々脱線するが、滞在中の我々審査団の一番の楽しみだったのが、食事であった。教授用食堂の一角で提供されたのだが、おどろくほど美味であった。三食フルコースで、手を変え、品を変え、絶品料理が登場した。例えば、到着した日の朝食に出てきたカーシャが、白くふんわりと炊き上がり、黄金色のバターに彩られる様子がうっとりするほど美しく、魅惑的であったので、ミルク粥が苦手な筆者も思わず手を伸ばしてしまった。これが言語を絶する味わいであったのだ。全員がすっかり魅せられ、2日目の朝に期待していたカーシャがないと知ったときは、ひどくがっかりしたものである。もっとも、代わりに出てきたブリヌイがまた美味で、その失望を銃十分補ってくれたのだが。メニュー自体は、特に変わっているわけではない。地元の新鮮な食材を、腕のよい料理人が調理したのであろう。おかげで、朝から晩までおなかいっぱい食べ続け、身動きに支障がでるほどであった。そして、このレストランをとりしきるのが写真中央の白衣の女性である。

写真１３：モルドヴィア大学構内の様子

審査員のわがままな要請をかなえるべく、走り回り、献身的に給仕してくれてた。さらに、我々が食卓で、モルドヴィア共和国における先住民族（フィン・ウゴル系のエルジャ人とモクシャ人）とロシア民族の微妙な関係についておしゃべりしていたところ、先住民族の貴重な情報を提供してくれた。見たところ分からなかったが、彼女はモクシャ語もエルジャ語も分かるバイリンガル、いやロシア語も不自由ないのだからトライリンガルなのだという。すると今度は、ロシア語の～はモクシャ語でなんというのかというリクエストにまで丁寧に答えてくれたのであった。一同すっかりおばさんのファンになり、こんなおいしい食事が食べられるのなら、モスクワからサランスクに移って来たいと言い出したほどである。

写真１４：文字通り、最後の晩餐

さて、最後のお祝いの席も、この食堂で供された。やはり、豪華な食事とアルコール類で歓待されたのであった。しかし、夜行列車の出発時間も迫り、名残惜しくも去らねばならなかった。短い間であったが、利発で好奇心旺盛な学生たちと接して、大変楽しかった。個人的にも、そして現代文学研究者としても、彼らの今後の活躍を、心から祈りたい。

（2010 年 8 月 30 日）

□本報告は、日露青年交流センター「2009 年度若手研究者等フェローシップ」の助成による研究成果の一部である。